

第三章
ふれあい



九二年一月二十八日に名古屋第一赤十字病院を退院した由希子には、これといつてすることがない。友人たちには相変わらず電話をかけまくって、病名を告げていた。週刊誌などにたびたび引用された久保由紀子への手紙は、こんな調子だ。

《お手紙ありがとうネ。心配してくれてありがとう。お見舞いに来てくれるなんて嬉しい。今度はまたいつ入院するか分からないけど、まあ私の心掛次第ってヤツね。私は私服着て化粧しちやえば病人って分からない位元気です。病名は知ってるかもしれないけど、白血病。美人しかならない………といういい加減な噂のある病気だよーん。私も久保りんと同じく髪の毛をバッサリ切ったよ。耳が全部出でて、5つあるピアスが目立つわ。自分ではロングヘアより似合うと思ってる。皆には会ってる？ 私は高校のとき仲良かった子には殆ど会ったよ。皆きれいになっちゃって、ちゃっかり彼氏できて全く!! イイナーって思っちゃやう。私も^{ほん}ホッだよ。周りに男はいっぱいいるのに何故？ って寂しいワ》(91年1月25日)

このとき久保由紀子は南山大学一年だったが、由希子の告別式で弔辞を述べること

になる。

外見だけでは病人とはわからないから、退院後の由希子は遊びに夢中になった。ただ、高校時代の親しい友人たちは、大学や短大、専門学校あるいは予備校に通っているか就職していたため、昼間はすることがない。起床もいつの間にか昼ごろになって、夜になってからカラオケなどに繰り出すことが多かった。

手紙も相変わらず出していたが、帰国してからは電話のほうが多くなっていった。かない日はほとんどない。日記らしいものは、中学時代の『生活の記録』くらいだったが、時間もあるし一日に少しでも何かを書いておこうと、三月十二日からB6判の手帳につけはじめた。

三月二十日には、ニュージーランド留学組が帰国した。退院したことは告げてあったが、由希子の慌ただしい帰国の際には世話になったので、母とともに名古屋空港に迎えに行った。持参したチューリップを一人ひとりに手渡した。みんな、たくましく大人っぽくなっていた。

せっかく感激の再会を果たしたというのに、大変なショックが待ち受けていた。夜、カラオケから帰って、久美子と喧嘩したのがもたらがった。喧嘩の原因は、動物の鳴き声を真似したりして、久美子の電話を邪魔したからである。

「お姉ちゃん、もう少し規則的な生活をしたら？」

わかつてる。十九歳にもなって仕事に就いていないし、学校にも通っていない。それは病気だから仕方ないとして、夜遅くまで遊び歩いて昼ごろ起き出す生活が、よくないことはわかっている。でも、ほかにすることがないし、自分でわかっていることを指摘されると、余計に腹が立つ。

「ブスが、また何を言いだすのよ」

いつものせりふが由希子の口から出た。もつときついことを言ったかもしれない。このときばかりは、久美子も黙って引き下がりはしなかった。

「ブスだって長生きはできるのよ。お姉ちゃんなんか、骨髄移植もできないもん。HLAの合う人がいないんだからね」

知らなかった。初めて聞く事実だった。白血球の型であるHLAが適合しないと、骨髄移植のためのドナーにはなれない。ドナーがいらないということは……。

「そんな検査、いつやったのよ。わたしには何も言わなかったじゃないの」

そういえば妙なことがあった。父がマイカーを買ったことをイトコが口にしたとき、新しい車に乗って気分がよかったと語っていた。なんで、うちの車にわたしの知らないうちに乗っていたのかと不思議な気がしたが、思い起こせば、血液検査で病

院に行くために乗ったのにちがいない。

「わたしは、もう死ぬしかないのよ!」

泣いて、泣いて、泣き叫んだ。ドナーがいなくても、死ぬしかないという思い込みが頭いっぱい広がり、何を言ったかよく覚えていない。

いきなり、母にほつべたをひっぱたかれた。力任せだったようで、ものすごく痛い。その痛さでハッとわれに返った。その後、家族みんなが抱き合って泣き、話し合った。「治療でよくなって出てきたんだから、今すぐどうということは無いはずだよ。病院を信じよう。いつかはドナーも見つかるはずだから」

母の勧めで風呂に入って、早めに寝ついた。

このころ、妙にリアルな夢を、由希子はたてつづけに見た。

《どこかのスーパーに行つて、私がどこかの赤ちゃんのほつべをかんで、赤ちゃんを殺してしまったという超恐ろしい夢を見た》(3月15日、日記)

《またまた今日はたくさん寝てしまった。それで、とーってもおそろしい夢を見た。私がまた人殺しをした。首をしめて殺しちゃった。あー怖い夢なんて見て、私の先は暗いものなんだろうか》(3月29日、日記)

そんな折での久美子の言葉だったから、ショックは大きい。今は体調がいいから移植の必要がないだけで、移植のときにはドナーはすぐ目の前にいるのだろうと思込んでいた。正確な知識が、そのころの由希子にはなかった。

ショックも一夜過ぎると、ずいぶん薄らいでいく。切り替えが早いのが由希子のいいところでもある。中学と高校の三年生のクラス会が相次いで予定されていたから、旧友に会える楽しみも立ち直りを早めるのに役立った。

クラス会では、みんな、とても気をつけてくれるのがわかる。でも、あまり気をつかわれても、かえってわずらわしい。

ふだんは、テレビを見ているときに気持ちが悪くなるような気がする。画面を見つめていれば考えることがなくていい。それより何より、眠っているときに最高だと思う。寝てしまえば、本当に何も考えなくて済むからだ。

《病院へ行った。病状はまあまあ。私の病気が良い状態なのは嬉しいけれど、神さまは少し意地悪でした。こんなやつてないと思います。私は困ってしまいます。私はわがままです。でもお父さんもお母さんも私のわがままを聞いてくれます。神さまにもきいてほしかった……。でも、私は何か、何を願っていたのでしょうか》(3月25日、日記)

《髪の毛をまた長くしたいけど当分無理。あと2年位たないとネ。2年生きられるかな。死ぬ時って、どんな気持ちなんだろう。死んでみないと分からないけど、死にたくない。私より早く死なないといけない人だっているでしょ。殺人した人とか。私はまだ誰も殺してないよ。迷惑かけても、殺してはいないよ》(3月28日、日記)

■コロとハチの死

飼い犬のコロが息を引き取ったのは、六月二十日だった。雑種のオスだが、由希子が小学校に入る前から飼っていたから、十四年も生きつづけたことになる。

《今日、お母さんが仕事に行く前にコロを見たら、コロが動かなくなっていた。お母さんが「コロ、死んじゃったわ」といったとき、ああと思った。昨日の夜、お父さんがコロがご飯を残していることを教えてくれたけど、こんなに早く……。昨日の夜、お肉買って来てねって言ったのが悪かったのかな。コロ、長生きしたね。私の病気がよくなったのはコロのお陰かもしれない。》

コロの分まで頑張って長生きするから、見守ってね。明日は友引でまだ一日ダンボールの箱の中だけと許してね。十四年間ありがとう》(日記)

七月五日には、ウサギのハチまでが死んだ。由希子が高校二年生のとき、妹の久美子と一緒にペットショップで買い求めてきたオスだ。とてもなついて、由希子はよくハチをスケッチしていた。

《今日、ハチが死んでしまった。今日は昼からお母さんとshoppingに行っていて、帰ってきたらハチが私のベッドの下から出てこなかった。いつものことだと思って「ねたろうさんだねえ」とお母さんが言って、ふんふんと思っただけで、昨日ハチと会ってなかったの、ハチを連れに行ったら冷たく、かたくなっていたのでびっくりした。お母さんと私で一時間位抱いて、水をやったりしたけど、余り良くならないので、病院に連れて行って点滴を打ってもらって、薬をもらって来て、ずっと看病してたけど、L.S.S位に息をひきとってしまった。最後ちよつとあばれて苦しがつたのがかわいそうだった。ハチにはいろいろ楽しいことを教えてもらった。ハチがいるだけで、明るく、話題はいつもハチのことだった。ハチ、ありがとう。突然の死だったけど、びっくりしたけど、これは仕方ないことだったんだよね。私の病氣

が良くなるにつれて、こんな辛いことが起きるなんて……。でもハチのぶんまで生きるからね。コロのぶんまで生きるから。天国でコロとハチ、仲良くするんだよ！ ねっ！》(日記)

日記を書くころには、かなり冷静になっていたが、ハチが死んだ直後などは久美子と一緒に泣きじゃくった。コロは天寿をまっとうしたといってもいいが、ハチはまだ四年しかたっていない。

いずれにしても、二匹のペットが、あいついで死んだのは、自分の身代わりだと由希子は強く感じた。

■再入院

体調に変化はない。病氣らしい自覚症状がまるでないからだ。ただ、病院からもらった薬を全部飲むと、眠くて仕方ないうえに、頭がフラフラする。だから、六月ごろから夜の一回分しか飲まなくなった。由希子は、それで十分だと思っていた。

ところが、体内では血液のバランスが崩れ始めていたようだ。八月二十六日の検査

では、白血球が八万四千近くに増えていた。九月二日の検査では二万台に減ったものの、九日の検査でまた五万近くに増えた。しかも、血小板が三万四千と通常の十分の一くらいしかない。

「明日から、また入院してもらいましょう」

主治医に告げられ、しばらく途絶えていた日記が、復活した。

《明日から一人部屋でのんびり暇な時を過ごす。いつ出られるのか分からない。自分では自覚がないのいい。やだやだ。インターフェロンの練習もするとか……。怖いよー。うえーん》(9月9日)

九月十日に入院した病室は、八月に完成したばかりの骨髓移植センターである。いわゆる無菌病棟で、真新しい部屋にきれいな洗面台やテレビが備えてあった。由希子は気に入った。一回目に入院した病棟を訪れたら、何人もの闘病仲間が亡くなっていた。

十一日になって、手足や胸などに点状の出血があった。血小板の数値が二万六千に落ちていた。この日、由希子は初めて血小板輸血を受けた。

翌日、病院に呼び出された母の知香子は、血小板ドナーの確保を要請された。

「ご存じですが、血小板は止血作用をもっているんです。お嬢さんはそれが減少

していますから、内出血でもすれば大変なことになります。そこで二、三日に一回は血小板を輸血しなければなりませんので、そのためのドナーが数人から数十人は必要なんです」

ドナーは、骨髓液だけを考えていればよかったのではなかった。

「明日にでも、すぐにですか」

「いえ、今すぐにといいわけではありません。基本的には日赤の血液センターから確保しますが、例えば深夜とか連休中とかで、すぐにでも必要な場合にお願ひすることになります。なにしろ、血小板の寿命は数日間と短いものですから、急な場合にはどうしても患者さんの関係者にドナーをお願ひすることになるんです」

血小板輸血は「ザルに水をためようとするようなもの」と、しばしば言われる。いくら輸血しても、すぐ次の輸血が必要になるからである。

《今日は久保りんがお見舞いに来てくれた。お花を買って来てくれたけど、

ここには置けないので持って帰ってもらった。A B型の血小板が必要なので、Oと、Mの彼のSくんとなおくんにもお頼みした。なおくんには直接言えなかったので、Aに話してもらった》(9月11日、日記)

《今日も久保りんが来てくれた。千羽鶴を持って。千羽もよく作ってくれた

なあ。嬉しい！ Aに匹してなおくんなんて言ったか聞いたらOKだって。よかったー。なおくんには迷惑かけっぱなしですごく気が引けるけど、今はそんなこと言ってられない。だって、まだまだたくさんやりたいこと残ってるもん。早く元どおりになって元気に楽しく生きたい。それと、元気になってからもずっと病気の大変さと、健康のありがたさを忘れないでいたい。人の優しさも忘れないでいたい》(12日、日記)

十三日には、前の病棟に移ったが、翌十四日には半年ぶりに熱が上がり、三九度五分にまでなった。

今後の治療方針について、由希子が母とともに病棟主治医に聞かされたのは、九月二十五日のことだった。

「あなたの現況は、慢性骨髄性白血病の加速期という状態です。この時期は、再び慢性期に戻るか、それとも急性転化に進むかというところにあります。今後については慢性期に戻ればインターフェロンの注射に入りますし、急性転化に進みそうであれば骨髄移植をせざるを得ません。移植の場合、ピッタリ適合したドナーは今のところ見つかっていませんが、どうしても移植ということになれば、お父さんがドナーに考え

られます」

そこで、父とのMLC(リンパ球混合培養)検査をすることになった。

「もし、お父さんともダメな場合はどうなるんでしょう」

「骨髄バンクに期待するしかありません。今のところは、血小板を補給しながら様子を見ていきましょう」

由希子には、やや難しい話だった。ニュージランドで病名告知を受けてこのかた、白血病であり骨髄移植をすれば助かるという話は聞いていたものの、骨髄移植をめぐる知識はさほど与えられていなかったのである。

《なおくんへ ずっと前まで死ぬのは絶対イヤだと思ってた。でも、こんな病気なんだから死は覚悟しないといけないことが、だんだんと分かかってきて、自分でもそれを受け止めることができるほどになった。医学的なことを言うと、今は「加速期」という時期で、白血球を抑えるのに強い薬を飲んでるので、血小板が自分の力で作ることができなくなっているの。だから、一日おきに血小板輸血をしているけど、このままずっとこの状態だと危ないから、移植をすることになるの。加速期がすんで、また慢性期に戻ったら「インターフェロン」という自己注射の練習をすることになるの》(9月28日)

手紙の下書きを日記代わりにしたのだが、この日はまだつづく。

《とにかく、私のHLAは日本で一番少ない型なの。移植はまず失敗ってこともないらしいけど、やっぱり怖い。移植の後遺症は、人によって違うらしいけど、内臓は殆どの人が悪くなるし、ヘルペスとかその他10種類位の病気になるらしい。もう今の段階では強い薬を使ったりしているので、将来、赤ちゃんはできないんだって。でもそれは仕方ないこと。もう結婚はできないと覚悟してる。キャリアウーマンになろうにもなれそうもないし、なんだか私の人生って波乱!! ってかんじ。でも、これも運命なんだから仕方ないと割り切ってる》

高崎直之が見舞いに来てきた。再入院になってから初めてになる。しかも、ちょうど血小板が必要な時期と重なっており、彼は快く提供してくれた。十月十六日のことだ。

由希子の血液型(赤血球)はAB型である。日本人の一〇パーセントにしかない、最も少ない型なのだ。このころは、一日おきといつていくらい血小板輸血をしてい

たから、同じAB型の直之が提供してってくれたのは、うれしい出来事だった。

《ほら、とんとん時間が経って行くでしょう。私の人生がどの位の長さか分かりっこないけど、1日1日が過ぎて行く。生きてる。今日も生きた。病気は体の中で進んでいるのかしら。私の血は知っていても、私自身には分からないので怖い。ふっと思つた言葉がある。おばあちゃんの家へピアノに通つていた頃、本堂にはつてあつた『生かされて生きる命を大切に』。なにげなく覚えていた言葉は、こうしてしみじみ思うときが、来るものなのか》

(10月21日、日記)

この日を最後に、この年の日記に記述はない。

二回目の入院では、一回目と違って外泊が少ない。初めての外泊は十一月九日から一泊だった。そのときは、友人たちと居酒屋に繰り込んだ。

もつとも、無断外出で看護婦に注意はされていた。病院近くの書店に出かけたときには、マスクをかけていなかったため、看護婦が怖い顔をしていたものだ。

十一月十四日、由希子は二十歳となった。

せっかくの誕生日だというのに、十日から熱が出て体のだるさがつつとつづいていた。当日は、横になれば腰痛が起き、ベッドに座ると胃が痛み出すといった調子で、夜中にはとうとう注射をうってもらった。ようやく軽快したのは二十日過ぎであった。

ところが、今度は髪の毛が目立って抜け始めた。二十日にそれと気づいた。インターフェロンの注射が始まったのは二十一日からなので、その副作用とは考えられない。二十四日と二十五日には「ゴツソリ」という表現がピッタリするほどの抜けようだった。

二回目の入院の最大のショックは、この脱毛である。ロングにしてもショートにしても、よく似合うはずだと思いい込んでいた由希子にとって、美の象徴の一つである髪の毛が抜けてしまうのは、死ぬようなつらさだった。

抜ける一方の髪の毛を捨てるにしのびず、ベッドサイドのビニール袋に入れた。外泊のとき自宅に持ち帰ったのだが、母に「また生えてくるんだから」と慰められて、ようやく処分した。

結局すべて抜けてしまい、母にロングのカツラを買ってきてもらった。髪の毛の硬さが気にはなったが、頭につけて鏡をのぞいてみると、そう不自然さは感じられない。

インターフェロンの量は二十八日から倍に増えた。白血球数は依然として増加を続けている。熱もつづいたため、由希子にはインターフェロンが合わないかと判断され、十二月七日には中止となった。

このまま推移すれば、由希子は「フツの患者」で終わっていたかもしれない。運

命的な出会いが、十二月にはたてつづけに起きるのである。

■運動家との出会い

磯和夫いそかずおと出会ったのは、再入院から一週間ほどたったころだ。

無菌病棟から一般病棟に移って、同室の丸井和子まるいかずこ（仮名）に紹介された。

「由希ちゃんと同じ慢性骨髄性白血病なのよ。骨髄バンク運動にもかかっている人だから、会ってみるといいわ」

二人をろって和夫の病室を訪ねた。和夫もまた、ほかの患者と同じように髪の毛が抜けていた。

「ぼくの発病は八九年二月だよ。アメリカの医者に告知されてね」

外国での告知は、由希子と同じだった。欧米では、告知がごく普通のこととなっているようだ。和夫は大手自動車会社の社員で、発病当時は、アメリカ企業との合併会社を設立するための要員として、家族ぐるみで滞米中だった。

「バッグだけ持って帰国したけど、家族とはだれにもHLAが合わなかった。大学病

院で通院治療をつづけながら仕事してたんだよ」

九一年五月に急性転化を起こし、六月初めにここへ入院してきた。インターフェロンを打っているという。由希子も、そのうち自己注射をする予定になっていた時期だ。「どんなふうにするのか、見せてくださいね」

そんなこともあったりして、次第に親密さを増していった。

磯和夫は、八九年に帰国してすぐ骨髓バンク運動に乗り出し、東海骨髓バンクと全国骨髓バンク推進連絡協議会の、ともに運営委員として活動を進めてきた。だから、病氣を知っているながら、明るく振る舞う由希子を見ていて、和夫にはひらめくものがあったのである。

「どうだろう由希ちゃん、ぼくのようなおじさんがテレビに登場しても、誰も注目してくれないよ。由希ちゃんみたいに若くてきれいな女性が出れば、少しは耳を貸してくれるさ。それでドナーが増えてくれるなら、願ってもないことじゃないか」

患者や患者家族が待ち望んできた骨髓移植推進財団が、その年十二月に発足するころとが確定していた。年明けからドナー登録の受け付けが始まるが、登録目標は当面十万人とされていた。それを五年間で達成しようというのだから、ドナー募集に際しての啓発ビデオづくりが、緊急の課題になっていた。和夫は全国協議会の運営委員とし

て、ビデオ出演してくれる適任者探しが、常に頭の中にあつた。

そのときには結論が出ないまま、和夫は十月十日にいったん退院していった。

また、磯とは別の立場から、骨髓バンク運動を進めていた患者が、骨髓移植を控えて入院していた。滋賀県の陶芸家・神山賢一である、

神山賢一は二十九歳だった九〇年二月、慢性骨髄性白血病と診断された。陶芸家の母・清子がドナー探しに立ち上がり、九一年三月のシンポジウムでは、賢一自身がテレビカメラの前に姿をさらして、協力を訴えた。直前の一月には、骨髓バンクと患者を結ぶ会を東京で結成し、自ら会長に就任した。

他人の中にはドナーを見いだせなかった賢一は、HLAが一部不一致の叔母から骨髓液を提供されての移植に臨むことにした。入院時期は、由希子の入院とほぼ重なっていた。

「元気になったら、骨髓バンク運動と一緒にやっぺいこうよ」

そう持ちかけた賢一は、十月十一日に移植を受けた。

磯和夫が再び病院に姿をあらわすのは、十二月十日だが、それは救急車による緊急入院だった。体調の悪さに我慢をつづけたものの、とうとう耐え切れなくなつてのことであつた。

和夫は、退院していた二カ月のあいだに、のちに由希子に直接かわつてくるNDP（全米骨髓バンク）のルートを開拓していた。

骨髓バンク運動に携わって、ほかの患者のためのドナー募集には精力的だった和夫だが、自分のドナー探しを全くしなかった。見兼ねた大谷貴子（東海骨髓バンク理事）が十月上旬、NDPの年次総会へ出席するため渡米する折に、和夫のHLAデータを持参して、ドナー検索を依頼した。

大谷貴子が帰国してから、一次の検索で一致したドナー候補者が八人もいることがわかった。次の二次検索のためには、和夫自身の血液を検体として送らなければならぬ。和夫はすべての手続きを自分自身でたどり、検体を成田空港まで運んだが、その夜に体調をくずしてしまったのである。

由希子が、大谷貴子とも会える機会がやってきた。貴子も慢性骨髓性白血病で、骨髓移植を受けた元患者である。ドナーは、きわめて珍しい例ながら、母の巻枝だった。自らの体験をまとめた『霧の中の生命』が出版されたばかりで、和夫が病院内で本の“行商”をしていた。

由希子と貴子と、双方を知っている和夫が、二人を引き合わせる労をとったのだ。

十二月十三日のことである。

この日、病棟の談話室に、五人の顔がそろった。貴子の母・巻枝は、和夫に手渡す本を紙袋に入れて抱えてきた。由希子の母・知香子は、外泊をする由希子を迎えにきたのである。

盛んに話しつづける貴子を見ながら、同じようにおしやべりな女性がいるものだと、由希子は感心しながら貴子の話を聞いていた。こういう女性に会うと、初対面という感じがしない。貴子は、臨死体験まで披露した。

「丘の上から見ると、目の前にお花畑が広がってて、そりやあきれいなんよ。そっちへ行こうとして丘を駆け降りると、蹴つまずいて、なんやろかと思ったら、なんとビール瓶の箱に足を突っ込んだの。ほら、昔あった木でできた箱よ。で、それ以上は足が前に向かへんかった」

移植を終えてすぐのころ、その話を聞かされた姉の睦子が、あんたが死ぬとしたら、アルコール性肝炎にちがいないと、大笑いしたという。そのあとの話が、由希子にはとても希望にあふれるものだった。国際結婚をしている睦子は、こうも言ったのである。

「そりやあ、貴子はベチャクチャと、すごいおしやべりやから、天国の神さまが『そ

んなるうさいのに來られてはたまらんから、天国の扉を閉めよう』って決めたんよ」それを聞いては黙っていられない。由希子はやおら立ち上がって、天井に向かって叫んだ。

「神様、わたしは大谷さん以上におしやべりですから、どうか天国に呼ばないでください！」

大谷貴子は、千葉大学の大学院生だった一九八六年に病名を告げられ、急性転化を起こしたあとの八八年一月に移植を受けた。

そのころ、急性転化後の骨髄移植は、成功率が一〇パーセント以下とされていた。しかし移植後の経過はきわめて順調で、その年の四月に退院して、八月に発足した名古屋骨髄献血希望者を募る会の代表に就いた。

募る会は、八九年十月に設立される東海骨髄バンクの、ドナー募集面の実働部隊で、貴子はその先頭に立って走りつづけてきた。

初対面とは思えないくらい気が合った。母親同士の話にも耳ざとく、由希子と貴子は、二人して「そんなこと言わんでもええ」などと、共同戦線を張って母親を牽制した。

そんな女性たちの姿を、磯和夫は静かに見守っていた。もともと寡黙な性格だが、

その場の雰囲気では、とても女性軍の話の輪に入っていけそうにない。ただ、由希子に向ける視線には、探し求めているダイヤモンドを、砂の中から見つけたような喜びが宿っていた。

「大谷さんはもう、とうが立っているし、ドナー募集の先頭に由希ちゃんを立てば、反応はものすごく違うと思うよ」

由希子も、ビデオに出ることにまんざらでもない気分になっていた。CMやドラマのオーディションにも応募したし、芸能界にはことのほか深い興味があった。骨髄バンクという堅い話であるのがちよつとばかり不満だが、大勢の人が見てくれるにちがいない。

にぎやかに語り合ったあと、由希子は母に連れられて病院をあとにした。

帰宅した先は、由希子が生まれ育ったところではない。新しいマンションの一室である。一家は、由希子が二度目の入院中に引っ越したのだ。十五日までの外泊中、ずつと部屋の整理に追われた。

この年の暮れには、外泊のチャンスがもう一回あった。二十三日から翌年一月三日までである。

ところが、外泊を利用して由希子が青春しているあいだ、ビデオ出演を勧めた磯和夫の病状が急変していた。

由希子がクリスマスパーティーを楽しんだ二十四日に、大谷貴子がクリスマスケーキを携えて和夫の病室を訪れたとき、しんごさを訴えはしたが、それまでの和夫とそう変わった様子はなかった。だが、妻の幸子に、いつも夕食時刻になると「帰っていいよ」と言う和夫も、この日はさすがに言い出さなかった。夜に入って高熱が出た。

入院中ずっと九人部屋にいた和夫が、個室に移ったのは二十五日朝である。しばらくは名前を呼ばれて応じていたが、やがて意識不明に陥った。そのまま二十七日に亡くなったのだ。四十三歳の誕生日のことであった。

意識不明になってから、病室に駆けつけた大谷貴子は、骨髄移植推進財団のパンフレットを、和夫の指のあいだにはさんで呼びかけた。

「やっと出来上がったのよ。ほら、磯さんが一生懸命に頭をひねったじゃないの。こ

れでドナー登録者はうんと増えるわよね」

多くの患者が待ち望んできた骨髄移植推進財団が、十八日に設立されたばかりなのだ。ほんのわずかながら、パンフレットをはさんだ和夫の指に力が入ったように、貴子には見えた。

磯和夫の葬儀は二十九日、名古屋駅に近いセレモニーホールで執りおこなわれた。

死去を知らないままの由希子は、この日、病院で葉をもらうため名古屋へ出かけた。低く垂れ込めていた雲から、とうとう白いものが降り始めたのに気づき、名鉄電車の車窓から外の景色を見詰めていた。新名古屋駅に近づくにつれ、横なぐりの風に吹雪模様となった。

「あれっ」

つぶやいた由希子には、直感するものがあつた。外泊する前に和夫と会ったとき、ふだんと変わりない姿を見せていたが、なぜか和夫の葬儀だと思つたのだ。動く電車の中からでは、会葬者の表情をとらえることはできないが、舞い踊る雪が会葬者の黒の上着に張りついているのが見えた。

年末年始を外泊で楽しく過ごしていた由希子は知らなかったが、貴子は、和夫の最

後の遺志を果たすにはどうすればいいかと考えつづけていた。ビデオ出演を話し合ったときの、由希子の「軽いノリ」がやや気になっていたからである。

骨髄移植推進財団の啓発ビデオに患者自身が出演すれば、マスコミが見過すはずがない。取材が殺到することは目に見えている。そうなれば、プライバシーはないに等しくなる可能性も出てくる。二十歳になったばかりのうら若い女性が、それに耐えられるかどうか……。

貴子はその心配を年明け早々、由希子に打ち明けてくれた。

「マスコミに出るっていうことは、いい影響を及ぼすだけとは限らないのよ。いろんな人から、それこそ、あることを言われるし、それで泣くのは由希ちゃんよ」

「大谷さんにも、そういうことがあったの？」

「そう。ある元患者家族からは、面と向かって『うちの子どもは死んでしまって、あんただけ生きているのが、憎らしい』と言われたことだってあるもん」

退院してすぐ骨髄バンク運動を始めた貴子は、その四年近い運動の経験がある。「マスコミだって、こっちがしゃべったことがそのまま伝わらないもの。編集されると、思いがけない内容に変わってしまうこともあるのよ」

あるテレビ局の取材で、骨髄バンクの意義を長い時間かかって説明したのに、収録の終わりごろになって、ほんの短時間しゃべらされた言葉だけが、放送ではクローズアップされたことも一度や二度ではない。

「それと、これが一番心配なんやけど、結構すけずけとプライバシーに入ってくるのよ。わたしは、多少のプライバシーを放棄してでもやりつづけない事業だと思っから、仕方ないと考えているけど、それに耐えられずに途中で『やめた』と言われると、結果的にバンク運動の足を引っ張ってしまうことになるわけ。だから、やると決めたら、後戻りしないような覚悟が必要だと思っのよね」

大変そうだなとは、頭では理解できる。しかし、貴子にできたのだから、わたしにできないはずはないと、由希子は思う。

「途中で『やめます』なんて弱音は、絶対はきません。大谷さんに教わりながら、運動をつづけていきます」

由希子は決断した。

貴子が最初に連絡をとったのは、地元テレビ愛知だった。九二年の成人式に、由希子が参列することになっていたのである。式場などでの由希子の姿が、初めてテレビに登場することになる。